

# 第3回「富里ゆかりの偉人たち」

～ 郷土の誇れる十三人 ～

於：富里市立図書館

2008・10・19

林田利之

## 1. 富里出身の人物

①力士：鬼面山与一右衛門（きめんざんよいちえもん）（図1）

生没年：明和5（1768）年4月10日～天保3（1832）年1月16日

最高位は大関で、本名は國本与平治といます。

身長185cm、体重は158kgと伝えられています。

寛政年間から文化年間にかけて活躍した力士ですが、その出生地については長らく不明のままでした。寛政2（1799）年に刊行された『緯名出処記（あだなしゅっしょき）』によれば、鬼面山の出身地として「下総戸幡村の産、中沢与平治の子」とあり、この戸幡村がどこなのか確認されないまま、以後の相撲書はこれを転記し続けてきたのでした。

昭和37（1962）年、『千葉日報』に『房総力士伝』を連載執筆した鳥海宗一郎氏の丹念な調査の結果、鬼面山の出生地は現在の富里市中沢地区で、屋号を与平治という國本家であることが確認されました。現在、國本家に遺品は伝わってはいませんが、仏壇には鬼面山の位牌が祀られ、次のように記されています。

「天保三辰歳七月十日没 目方四十二貫目 丈六尺一寸 相生院體力日等信士 國本与平治角力ナリ 鬼面山改西大関年寄成 生年六十六歳死ス 江戸内藤新宿住居勝の浦与一右衛門 根津竹下日蓮宗常見寺葬」

國本与平治は21歳のときに角界に入り、最初は大阪の小野川一門の門人として活躍しますが、後の江戸相撲の勝ノ浦与一右衛門の門人となっています。寛政元（1789）年に「岩ヶ根国五郎」の名で初登場しました。この頃は明石藩松平家のお抱え力士でしたが、寛政5（1793）年10月、四国阿波の蜂須賀家にスカウトされて「阿州（現在の徳島県）」の筆頭となり、阿波の名山、高根山の名を賜り「高根山与一右衛門」と改名します。さらに寛政9（1797）年3月場所の6日目からは「大岩」と改名して出場し、寛政11（1799）年11月からは、藩の力士名として二代目になる「鬼面山」を襲名し、「鬼面山与一右衛門」と名乗るようになります。

「大岩」と改名した時期から不出場が多くなっていましたが、文化5（1803）年3月に関脇へと昇進し、時の大関柏戸（図2）の下で連続10場所を関脇として務めて人気力士の一人となりました。文化10（1813）年2月にはようやく大関にまで昇進しましたが、この年の場所は全休となり、11月には関脇に陥落して引退しました。46歳で引退した後は、師名である勝ノ浦を継ぎ、後進の指導にあたりました。

幕内生活20年、勝率72.7パーセント、大関一場所、関脇13場所、優勝同点一回の戦跡を残していますが、時の大関雷電（図3）には一度も勝つことができず、10連敗であったと伝わっています。



図1 鬼面山（勝川春英 画）



図2 柏戸宗五郎（勝川春英 画）



図3 雷電爲右エ門（勝川春亭 画）



図4 玉垣額之助（勝川春英 画）

また、千田川の玉垣（図4）にも1回しか勝っておらず、大関としてはやや貫禄不足の感があったようです。息子も岩ヶ根与市と名乗って二段目まで昇進、その後は勝ノ浦を継ぎました。化粧回し、太刀が中沢昌福寺に奉納されたと伝えられていますが、それらが現在昌福寺に残されているのか否かについては確認されてはいません。

また、「真佐喜のかつら」という江戸時代の随筆には鬼面山の怪力を偲ばせる記述が残されています。これによると、鬼面山は腹が大きく前屈が困難であったため、煙草を吸うときには煙管に粉を詰め、左手で火鉢の獅子脚を掴み上げてそれで火を点けていたそうです。ある時、雷電の弟子達が鬼面山を困らせようと火鉢の灰の下に四文銭を敷き詰め、火鉢をいつもよりも重くしたそうです。しかし、鬼面山はまったくいつもと同じ調子で煙草に火を点けたため皆驚き、「今日はその火鉢いつもより重くは思わないか」と尋ねました。ところが鬼面山はなに食う顔で「そういわれば少し重くも思う」と悠然と答えたとのことです。

②力士：千葉ヶ寄俊治（ちばがさきとしじ）（図5）

生没年：明治26（1893）年4月10日～昭和8（1933）年1月16日

七栄地区出身の大相撲力士で、二十山（はたちやま）部屋に所属していました。最高位は大関で、本名は実倉俊治といます。現役時代の体格は身長176cm、体重は120kgありました。

子供の頃から宮相撲で慣らし、17代横綱だった初代小錦（現在の横芝光町出身）（図6）が興した二十山に入門、明治44（1911）年6月場所で序ノ口から初土俵を踏みました。出世は順調で、幕下にいた大正2（1913）年5月場所ではそれまで無敗の快進撃を続けていた栃木山（のちに27代横綱になります）に初黒星をつけて話題をさらいました。初土俵から4年後の大正4（1915）年5月場所で十兩昇進、大正6（1917）1月場所入幕と、期待に違わず順調に出世して行きました。

さほど大柄ともいえない体格でしたが、中アッコと呼ばれる体型



図5 千葉ヶ寄俊治 氏